

子どもの孤独感および社会的行動特徴 に関する仲間知覚と自己知覚

仲間内地位群間比較と下位群間比較

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成8年4月30日受理)

Children's loneliness and peer- and self-perceptions of the characteristics of their social behavior: Peer status group and subgroup comparisons

Kenichi MAEDA

子どもの仲間関係に関する研究では、これまで多様な情報源（仲間、教師、行動観察など）を利用しながら、仲間からの拒否や孤立と関連する社会的・認知的特徴を明らかにしてきた（Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; Hymel & Rubin, 1985）。しかし最近の研究は、他者からの情報に基づく社会的・認知的な諸特徴を子ども自身がどの程度自覚しているのか、あるいは他者知覚と自己知覚の一致度やズレが子どもの仲間関係とどのように関連するののかに関心を寄せている。これらの研究は、仲間関係に問題をもつ子どもほど、一般に自己のコンピテンスに関して否定的な自己知覚パターンを示し、自己有能感や自尊心が低く、孤独感が高い傾向にあると報告している（Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams, 1990; Boivin & Begin, 1989; Hymel, Bowker, & Woody, 1993; Hymel & Franke, 1985; 前田, 1995 a, 1995 b; 佐藤・佐藤・高山, 1990）。たとえば、Boivin & Begin (1989) は、小3と小4の児童222名を対象にしてソシオメトリック指名法を実施し、その結果に基づいて仲間から人気のある人気児、拒否されている拒否児、人気も拒否も平均的な平均児、無視されている無視児、ある仲間からは人気があるが他の仲間からは拒否されている両論児の5地位群に分類した。その後、Harterの知覚されたコンピテンス尺度（Perceived Competence Scale）を使用して彼らの自己知覚を比較した結果、人気児群は学業、社会的受容、運動技能、全般的自尊心の4領域で平均児群よりも自己を肯定的に知覚していたが、身体的外見や行動の領域では平均児群と差がなかった。両論児群は学業、行動および全般的自尊心の3領域で平均児群よりも自己を否定的に知覚していたが、無視児群は6つの領域すべてにおいて平均児群と差がなかった。さらに

拒否児群には、全般的に自己を肯定的に知覚する下位群（拒否児A群）と自己を否定的に知覚する下位群（拒否児B群）があることを指摘している。Boivin & Begin (1989) は教師知覚についても、これらの6群間で比較している。その結果、平均児群と比べて人気児群は運動技能の領域で有意に高く、拒否児B群や両論児群は行動領域で有意に低く評定されていたが、拒否児A群や無視児群は平均児群と差がなかった。

Boivin & Begin (1989) の研究はコンピテンスに対する子どもの自己知覚と教師知覚とが必ずしも一致しないことを示すものである。しかし、彼らの研究では自己知覚の尺度項目と教師知覚の尺度項目とが必ずしも同一のものではないので、自己知覚と教師知覚の不一致を子ども自身の見方と教師の見方の相違にのみ原因づけることはできない。この点を考慮して、前田 (1995 a) は同一の内容から成る社会的行動特徴項目を使用し、彼らの社会的行動特徴に対する仲間知覚測度（仲間がどのように見ているか）と自己知覚測度（子ども自身がどのように見ているか）および孤独感に関する自己報告測度について地位群間や下位群間で比較した。まず地位群間比較の結果では、両論児群や拒否児群は人気児群よりも攻撃的であると自己知覚していた。しかし仲間知覚と比べると、両論児群や拒否児群の自己知覚はまだ不正確であり、自己の攻撃性を過小評価する傾向にあった。また、拒否児群は両論児群や人気児群よりも自己の社会的コンピテンスを低く評定していたが、それでも仲間知覚と比べると、自己の社会的コンピテンスを過大評価する傾向にあった。下位群間比較の結果では、攻撃的な拒否児群は引っ込み思案な拒否児群よりも攻撃的であると自己知覚していたが、仲間知覚よりも自己の攻撃性を過小評価する傾向にあった。また、社会的コンピテンスの高い人気児群は低い人気児群や平均児群よりも、引っ込み思案傾向の低い無視児群は高い無視児群よりも自己の社会的コンピテンスを高く自己知覚していた。これらの結果と呼応して、孤独感や疎外感に関する自己報告測度では、拒否児群の中でも特に引っ込み思案傾向の強い拒否児群が強く、無視児群の中でも引っ込み思案傾向の高い無視児群が強かった。

前田 (1995 a) の研究結果は、仲間関係に問題を抱えやすい拒否児群やその下位群ほど、自己知覚と仲間知覚のズレが大きく、自己の社会的行動特徴を正確に自己知覚していないことを実証するものである。自己の否定的な社会的行動特徴を過小評価し、自己の肯定的な社会的行動特徴を過大評価すれば、彼らは自分の対人行動に問題があるという自覚やそれらの行動を自発的に変容させる必要性を感じないであろう。したがって、彼らは相変わらず否定的な社会的行動を実行し、その結果ますます仲間から拒否され、孤独感や疎外感が高まるという悪循環に陥るのではないかと考えられる。この解釈は、学年が変わっても拒否児の地位は維持されやすいという Coie & Dodge (1983) の結果ともうまく一致する。一般に、自己のコンピテンス領域や社会的領域に関する自己評価や自己知覚の正確度は、加齢と共に高まることが実証されている（たとえば、Harter, 1983 ; Hymel & Franke, 1985）。このような自己知覚の発達的变化を考慮すると、前田 (1995 a) の結果は小3～小6の学年でも仲間関係に問題をもつ子どもほど、同年齢の子どもよりも自己知覚の発達が遅れている可能性を示唆する。

仲間関係に問題をもつ子どもほど自己知覚の発達が遅れているとすれば、それはいつ頃からののかという発達的問題、あるいは自己知覚が比較的正確な発達段階では自己知覚と仲間関係とは関連しないのかという地位群間差に関する問題を明らかにするためには、前田 (1995 a) の対象児よりも低年齢の子どもを対象にした研究が必要である。本研究では、これらの問題を検討するために小学1年生を対象にし、前田 (1995 a) と同様に同一内容から成る社会的行動

特徴項目を使用して、社会的行動特徴に関する仲間知覚測度と自己知覚測度および孤独感に関する自己報告測度について地位群間比較と下位群間比較を行った。

ところで、本研究では2つの分類方法を使用して下位群を分類し、2種類の下位群間比較を行った。2つの分類方法とも、ソシオメトリック指名法の結果から人気児、拒否児、平均児、無視児、両論児の5地位群を分類する段階までは共通している。第1の分類方法では前田(1995a)と同様に、さらに社会的行動特徴の仲間知覚測度の結果を組み合わせて、7つの下位群に分類した。ただし、本研究では小学1年生118名を対象にしているので、前田(1995a)の対象児数(459名)よりもはるかに少なく、そのため拒否児群を2つの下位群にしか分類できなかった。また、仲間知覚測度の分類基準も前田(1995a)に比べると、はるかに緩い基準を適用した(前田, 1995aおよび本研究の表1を比較参照)。したがって、本研究の下位群と前田(1995a)の下位群はまったく同一の基準で分類されたものではない。しかし、前田(1995a)と類似した分類方法を適用しているため、両研究の結果を比較しながら、発達的な差異をある程度検討できると考えた。

第2の分類方法ではParker & Asher(1993)の方法に従って、ソシオメトリック指名法の肯定的指名同士または否定的指名同士の相互選択数の多少に基づいて、拒否児群を3つの下位群に、無視児群を2つの下位群に分類した。Parker & Asher(1993)は、仲間受容度の低い小3～小5の子どもの中でも、友人のいない下位群の孤独感が1名以上の友人をもつ下位群よりも強いことを見出している。彼らの研究ではソシオメトリック指名法の肯定的指名同士の相互選択数だけを基準にして、友人の有無を区別している。それに対して、本研究では表1に示すとおり、肯定的指名同士の相互選択数と否定的指名同士の相互選択数を組み合わせて下位群を分類した。友人関係は本来、肯定的指名を互いに選択し合う関係にあると考えられるけれども、本研究では肯定的な親密関係と否定的な対立関係の両方を考慮して、各下位群間の相違を明確にしようと試みた。なお、Parker & Asher(1993)ではソシオメトリック評定法の結果に基づいて高受容児群、中受容児群、低受容児群の3群に地位群を分類しているため、低受容児群の中に含まれると考えられる拒否児と無視児の相違やそれぞれの下位群の相違を検討できない。本研究では拒否児と無視児の区別をしているため、これらの地位群間比較と同時に、それぞれの下位群間比較も検討できる。この点も、本研究とParker & Asher(1993)の分類方法の相違点である。

方 法

対象児 対象児は愛媛大学教育学部附属小学校の1年生118名であった。彼らの平均年齢と年齢範囲は7歳3か月(6歳8か月～7歳8か月)であった。男女の内訳は表1に示すとおりである。

手続き 各クラス単位で以下の調査を集団で実施した。(1)ソシオメトリック指名法：クラスの男子には男子全員の名簿を、女子には女子全員の名簿を印刷して渡し、「あなたが小学校で一緒に遊びたい子」(肯定的指名)と「あなたが小学校で一緒に遊びたくない子」(否定的指名)をそれぞれ3名以内ずつ選んで、その名簿番号を回答欄に記入させた。

(2)ソシオメトリック評定法：(1)と同様に同性の仲間全員の名簿を印刷して渡し、「あなたはクラスのお友達と、どのくらい一緒に遊びたいと思っていますか」と質問して、同性仲間全員

表1 対象児の各地位群および下位群の人数内訳と分類基準

群	分類基準	男	女	全体
(1)地位群				
人気児群	$SP > 1, L > 0, D < 0$	15	16	31
拒否児群	$SP < -1, L < 0, D > 0$	10	13	23
平均児群	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	21	17	38
無視児群	$SI < -1, L < 0, D < 0$	11	10	21
両論児群	$SI > 1, L > 0, D > 0$	3	2	5
	計	60	58	118
(2)下位群 (仲間知覚尺度得点に基づく)				
人気児	C高群 $CZ > 0.5$	7	9	16
	C低群 $CZ < 0$	4	5	9
拒否児	A拒群 $AZ > 0.5$	3	8	11
	W拒群 $WZ > 0.5$	2	3	5
平均児	T平群 $-1 < AZ, CZ, WZ < 1$	16	14	30
無視児	W高群 $WZ > 0.5$	3	2	5
	W低群 $WZ < 0$	6	6	12
	計	41	47	88
(3)下位群 (指名法の相互選択数に基づく)				
拒否児	I 群 肯定=0, 否定=0	4	4	8
	II 群 肯定=0, 否定=1 or 2	4	2	6
	III 群 肯定=1 or 2, 否定=0	1	7	8
平均児	I 群 肯定=0 or 1, 否定=0	19	12	31
無視児	I 群 肯定=0, 否定=0	7	8	15
	II 群 肯定=1 or 2, 否定=0	3	2	5
	計	38	35	73

A: 攻撃性尺度得点 C: 社会的コンピテンス尺度得点 W: 引っ込み思案尺度得点
 肯定: 肯定的指名の相互選択数 否定: 否定的指名の相互選択数

について3段階で評定させた。評定方法は「遊びたい子」には◎を、「あまり、遊びたくない子」には△を、「どっちかという、遊びたい子」には○を付けさせた。

(3)仲間知覚指名法: 表3に示す9項目の質問を印刷した用紙を見ながら、それぞれの質問に該当する同性仲間の名簿番号を3名以内ずつ回答欄に記入させた。

(4)自己知覚評定法: 質問項目は表3の9項目と同様であるが、自己評定に適合するように一部表現を変えた。たとえば、表3の項目1「自分からあまり話しかけない子」の場合には「友達に自分からあまり話しかけませんか」という表現に変えた。対象児はそれぞれの質問に対して、自分がどの程度当てはまるかを3段階で自己評定した。

(5)孤独感評定法: Asher & Wheeler (1985) を参

表2 孤独感の自己評定項目

項目	質問内容
(1)	小学校で、新しいお友達とすぐに仲良くなれますか。
(2)	小学校で、お話するお友達はいますか。
3	小学校で、一人ぼっちだと思いますか。
(4)	小学校で、お友達と仲良く遊んでいますか。
(5)	小学校では、たくさんお友達がいますか。
6	小学校では、お友達がなくて淋しいですか。
(7)	小学校で遊ぶとき、すぐに遊び友達が見つかりますか。
8	小学校で、仲良しの友達をつくるのは難しいですか。
9	小学校で、みんなから仲間はずれにされていると思いますか。
(10)	誰かに手伝ってほしいとき、頼めるお友達はいますか。
(11)	お友達は、あなたのことを好きだと思いますか。

() 付きの項目は得点の方向を逆にして得点化した。

考にして、表2に示す11項目を用意し、各項目について3段階で自己評定させた。孤独感評定法の実施にあたっては、まず最初に「あなたは、アイスクリームが好きですか」と「今日の朝ご飯はパンを食べましたか」の2つの質問を実施し、回答の仕方を理解させた。また「お家ではテレビをたくさん見ますか」、「絵を描くのは好きですか」、「運動場で遊ぶのは好きですか」の3つの質問を表2の孤独感質問項目2または3項目ごとに挿入した。

得点化の方法 (1)ソシオメトリック指名得点：まず対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。本人を除く同性仲間の人数は欠席などにより、クラス間で多少異なり、17名～19名の範囲であった。したがって、それぞれの合計指名数は最小0～最大19の範囲にわたる。そこで、それぞれの合計指名数を本人を除く同性仲間数で除算し、仲間一人当りからの指名数を算出した。その後、同一学年の同性3クラスの平均値とSDに基づいて標準得点に変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（SP得点=L-D）と社会的影響力得点（SI得点=L+D）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を表し、D得点は仲間から積極的に拒否される程度を表す。SP得点とSI得点はそれぞれL得点とD得点の合成得点である。従来の研究によると、L得点とD得点の相関は負相関か無相関に近く、両得点が必ずしも一次元的な表裏関係にないと考えられている。本研究でも男子（N=60）で $r = -.30$ （ $p < .05$ ）、女子（N=58）で $r = -.43$ （ $p < .01$ ）、男女全体（N=118）で $r = -.36$ （ $p < .01$ ）となり、いずれも中程度の負相関であった。またSP得点とSI得点の相関は無相関に近く、両得点は独立の次元であると考えられている。本研究でも男子（N=60）で $r = .00$ 、女子（N=58）で $r = -.01$ 、男女全体（N=118）で $r = -.01$ であった。

仲間から肯定的指名を受けた対象児が、その仲間の1名を肯定的指名で選択している場合に対象児の肯定相互選択数を1、仲間の2名を肯定的指名で選択している場合に肯定相互選択数を2、3名を肯定的指名で選択している場合に肯定相互選択数を3とした。このように、肯定相互選択数は肯定的指名同士の数であるから、最小0～最大3の範囲にわたる。同様にして、否定的指名同士の数に基づいて対象児ごとに否定相互選択数を求めた。

(2)ソシオメトリック評定得点：対象児ごとに、仲間から◎を付けられた場合に評定値3を、○を付けられた場合に評定値2を、△を付けられた場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。本人を除く同性仲間数は17名～19名の範囲であるから、評定値の合計得点は最小17点～最大57点の範囲にわたる。この合計得点を評定した同性仲間数で除算して仲間一人当りからの平均評定値を算出した。この平均評定値は各対象児が多数の仲間から実際に受容されている程度を集約した一次元の指標であり、得点が高いほど仲間からの受容度が高いことを意味する。なお、本研究における平均評定値とL得点との相関値は男子（N=60）で $r = .64$ （ $p < .01$ ）、女子（N=58）で $r = .61$ （ $p < .01$ ）、男女全体（N=118）で $r = .62$ （ $p < .01$ ）となり、いずれも高い正相関を示した。また、平均評定値とD得点との相関値は男子（N=60）で $r = -.63$ （ $p < .01$ ）、女子（N=58）で $r = -.72$ （ $p < .01$ ）、男女全体（N=118）で $r = -.67$ （ $p < .01$ ）となり、いずれも高い負相関を示した。

ソシオメトリック評定法では各対象児は仲間全員から3段階で評定され、仲間全員を3段階で評定している。そこで肯定相互選択数と同様にして、対象児ごとに評定値3同士の数を相互選択数(3)、評定値2同士の数を相互選択数(2)、評定値1同士の数を相互選択数(1)として、それぞれの相互選択数を求めた。

(3)仲間知覚尺度得点：L得点と同様に，仲間知覚の項目ごとに同性仲間一人当たりからの指名数を求め，それを標準得点に変換した。この標準得点に基づいて9項目に関する主因子分析を行った。表3は，小1全員（N=118）のデータに基づく因子分析の結果から，直交バリマックス回転後の因子構造行列を示したものである。因子負荷量の絶対値が0.50以上の項目をみると，第I因子は項目2，4，7の3項目から成っている。これら3項目はいずれも攻撃性に関連するので，第I因子を「攻撃性」因子と命名した。第II因子は項目3，5，9の3項目から成り，社交性や友好性に関連しているので，第II因子を「社会的コンピテンス」因子と命名した。第III因子は項目1，6，8の3項目から成り，いずれも対人的消極性に関連しているので，第III因子を「引っ込み思案」因子と命名した。対象児ごとに，それぞれの因子を構成する3項目ずつの標準得点の平均値を算出し，さらに学年全体で性別に再度標準得点に変換して攻撃性尺度（以下A尺度と略す）得点，社会的コンピテンス尺度（以下C尺度と略す）得点および引っ込み思案尺度（以下W尺度と略す）得点を構成し，以下の分析で使用した。なお男子（N=60）と女子（N=58）別にも同様の因子分析を行った。その結果，どちらの因子分析においても表3と同様の3項目ずつから成る3因子が抽出され，これら3因子で全分散の65%（男子）と69%（女子）を説明していた。各因子分析において3因子を構成した各項目の因子負荷量の範囲は男子（N=60）で.48～.90，女子（N=58）で.60～.90であった。

表3 仲間知覚得点の因子分析の結果（N=118）

項目	仲間知覚指名法の質問内容	因子			h ²
		I	II	III	
1.	自分からあまり話しかけない子	.02	-.18	.74	.58
2.	自分から言い争いやけんかをしかける子	.89	-.15	-.03	.82
3.	たくさんの友達と仲良く遊ぶのが上手な子	-.18	.82	-.18	.74
4.	自分の思いどおりにならないと，すぐに怒る子	.90	-.15	-.02	.83
5.	友達に親切で，みんなのことをよく考える子	-.14	.81	.00	.67
6.	おとなしくて，あまり目立ちたがらない子	-.26	.07	.57	.39
7.	他の子によく命令する子	.80	.11	-.03	.65
8.	友達とあまり遊ぼうとしない子	.10	-.04	.66	.45
9.	みんなのリーダーとなって，友達をうまくまとめる子	.15	.87	-.01	.79
	平均	2.40	2.18	1.34	5.92
	寄与率	.27	.24	.15	.66

(4)自己知覚尺度得点：仲間知覚のA尺度，C尺度およびW尺度を構成する3項目ずつに対応させて，3項目それぞれの自己評定値を加算し，各尺度得点とした。したがって，自己知覚の各尺度得点は3点～9点の範囲にわたり，得点は多いほど各尺度の傾向が強いと自己評定していることを意味する。

(5)孤独感得点：孤独感に関する11項目の自己評定値を加算し，11項目の合計得点を孤独感得点とした。したがって，孤独感得点は11点～33点の範囲にわたり，得点は多いほど孤独感が強いことを意味する。Cronbachの α 係数を算出して孤独感項目の内的一貫性を検討したところ，男子（N=60）で $\alpha = .73$ ，女子（N=58）で $\alpha = .60$ ，男女全体（N=118）で $\alpha = .68$ であった。

(6)自己知覚の正確度得点：この得点は次のようにして算出した。まず3つの尺度それぞれに

ついて、対象児の自己知覚尺度得点を学年全体で性別に標準得点へ変換した。そのあと、各自知覚尺度得点の標準得点から、それに対応する仲間知覚尺度得点の標準得点を減算して、両標準得点間のズレ得点を求めた。仲間知覚は子どもの実際の社会的行動特徴を完全に客観的に評価するものではないが、多数の仲間の見方を集約したものであり、比較的客観性が高いと考えた。したがって、ズレ得点が+の場合はその尺度について自己を過大に評価していることを意味し、反対に-の場合は自己を過小評価していることを意味する。

地位群と下位群の分類方法 地位群の分類は Coie & Dodge (1988) の分類方法に従った。指名法の L 得点, D 得点, SP 得点および SI 得点に基づいて、各対象児を 5 つの地位群のいずれかに分類した。各地位群の人数内訳と分類基準は表 1 に示すとおりである。人気児群は多くの仲間から好かれ、拒否されることの少ない子どもたちから構成される。拒否児群は逆に多くの仲間から拒否されやすい子どもたちから構成される。平均児群は仲間から好かれる程度も拒否される程度も平均的な子どもたちから構成される。無視児群は仲間から好かれることも拒否されることも少ない子どもたちから構成される。両論児群は、仲間から好かれることも拒否されることも多い子どもたちから構成される。

下位群の分類については次の 2 つの視点から分類した。第 1 の分類視点では、両論児群を除く他の 4 つの地位群の中から、さらに表 1 の仲間知覚尺度得点の基準を満たす者を選出して、7 つの下位群を構成した。表 1 の AZ, CZ, WZ はそれぞれ仲間知覚の A 尺度得点, C 尺度得点および W 尺度得点 (いずれも標準得点) を意味する。したがって、人気児の中で C 尺度得点の高い子どもたちが C 高群を、低い子どもたちが C 低群を構成する。また、拒否児の中で A 尺度得点の高い子どもたちが A 拒群を、W 尺度得点の高い子どもたちが W 拒群を構成する。平均児の中でいずれの尺度得点も平均的な子どもたちが T 平群を構成する。同様に、無視児の中で W 尺度得点の高い子どもたちが W 高群を、低い子どもたちが W 低群を構成する。

第 2 の分類視点では、両論児や人気児を除く他の 3 つの地位群の中から、肯定相互選択数または否定相互選択数に基づいて表 1 の基準を満たす者を選出し、6 つの下位群を構成した。表 1 の「肯定」は肯定相互選択数を、「否定」は否定相互選択数を意味する。したがって、拒否児の中で肯定相互選択関係の相手も否定相互選択関係の相手もない子どもたちが拒否児 I 群を、肯定相互選択関係はないが否定相互選択関係をもつ子どもたちが拒否児 II 群を、肯定相互選択関係はあるが否定相互選択関係のない子どもたちが拒否児 III 群を構成する。無視児では否定相互選択関係のない子どもが多かったので、無視児の中から肯定相互選択関係のない子どもたちを無視児 I 群とし、肯定相互選択関係のある子どもたちを無視児 II 群とした。なお、平均児の中から肯定相互選択数が 1 以下で、否定相互選択数が 0 の子どもたちを選出して平均児 I 群を構成した。

結 果

5 地位群間の比較

表 4 は、性別を一括した全体の人数に基づいて、得点別に各地位群の平均値と SD を示したものである。得点別に 5 地位群間で平均値の有意差検定を行った。分散の群間等質性が保証されるときには 1 要因の分散分析を適用した後、Duncan 法を使用して各群間の差を検定した。分散の群間等質性が保証されないときには Welch 法を含む t 検定を使用して各群間の差を検

定し、その結果をまとめて報告する。

(1)ソシオメトリック指名得点：地位群の分類に使用したL得点、D得点、SP得点、SI得点について5地位群間の差を検定し、地位群分類の操作チェックを行った。いずれの得点でも分散は等質でなかった。平均値比較の結果をまとめると、L得点では人気児群が平均児群、無視児群、拒否児群の3群よりも（いずれも $p < .001$ ）、両論児群や平均児群が無視児群や拒否児群よりも（両>無と両>拒は $p < .05$ ；他は $p < .001$ ）有意に多かった。D得点では拒否児群が平均児群、無視児群、人気児群の3群よりも（いずれも $p < .001$ ）、両論児群や平均児群が無視児群や人気児群よりも（両>無と両>人は $p < .05$ ；他は $p < .001$ ）有意に多かった。SP得点では人気児群が平均児群、無視児群、拒否児群の3群よりも（いずれも $p < .001$ ）、両論児群、平均児群、無視児群の3群がそれぞれ拒否児群よりも（いずれも $p < .001$ ）有意に多かった。SI得点では両論児群が拒否児群、人気児群、平均児群、無視児群の4群よりも（順に $p < .05$, $p < .005$, $p < .001$, $p < .005$ ）、拒否児群や人気児群が平均児群や無視児群よりも（いずれも $p < .001$ ）、平均児群が無視児群よりも（ $p < .001$ ）有意に多かった。これらの結果は、本研究の地位群分類に使用したソシオメトリック指名法の得点が各地位群を明確に分類していたことを確認するものである。なお、肯定相互選択数では人気児群が平均児群、拒否児群、無視児群の3群よりも（人>平は $p < .002$ ；他は $p < .001$ ）、平均児群が拒否児群や無視児群よりも（順に $p < .005$, $p < .001$ ）有意に多かった。否定相互選択数では拒否児群が無視児群、人気児群、平均児群の3群よりも有意に多かった（順に $p < .05$, $p < .02$, $p < .02$ ）。

(2)ソシオメトリック評定得点：平均評定値では群の主効果が $F(4, 113) = 28.65$, $p < .001$ で有意となった。多重比較の結果、人気児群は他の4群よりも有意に多く、拒否児群は他の4群よりも有意に少なかった（人>両は $p < .05$ ；他は $p < .01$ ）。相互選択数(3)では人気児群が平均児群、拒否児群、無視児群の3群よりも（順に $p < .002$, $p < .001$, $p < .001$ ）有意に多かった。相互選択数(2)ではいずれの群間差も有意でなかった。相互選択数(1)では拒否児群が平均児群、無視児群、人気児群の3群よりも（順に $p < .02$, $p < .01$, $p < .002$ ）有意に多かった。

(3)仲間知覚尺度得点：A尺度得点では拒否児群が人気児群、平均児群、無視児群の3群よりも有意に多かった（いずれも $p < .001$ ）。C尺度得点では人気児群が平均児群、無視児群、拒否児群の3群よりも有意に多かった（いずれも $p < .001$ ）。W尺度得点では群の主効果が有意でなかった。

(4)自己知覚尺度得点：A尺度得点やW尺度得点では群の主効果が有意でなかった。C尺度得点では群の主効果が $F(4, 113) = 2.37$, $p < .10$ で有意傾向を示した。念のため、多重比較をしたところ、両論児群が他の4群よりも少ない傾向にあった。

(5)孤独感得点：孤独感得点では無視児群や平均児群が人気児群よりも（順に $p < .005$, $p < .05$ ）有意に多かった。

(6)自己知覚の正確度得点：A尺度のズレ得点では無視児群が拒否児群や両論児群よりも（順に $p < .002$, $p < .01$ ）、平均児群や人気児群が拒否児群よりも（順に $p < .001$, $p < .01$ ）有意に多かった。C尺度のズレ得点では群の主効果が $F(4, 113) = 8.13$, $p < .001$ で有意となり、拒否児群や無視児群が人気児群よりも有意に多かった（いずれも $p < .05$ ）。また、両論児群が他の4群よりも有意に少なかった（いずれも $p < .01$ ）。W尺度のズレ得点では群の主効果が $F(4, 113) = 2.53$, $p < .05$ で有意となったが、多重比較の結果ではいずれの群間差も有意

でなかった。

表4 各得点の地位群別平均値 (SD)

得点	人気児群 (N=31)	拒否児群 (N=23)	平均児群 (N=38)	無視児群 (N=21)	両論児群 (N=5)
(1)ソシオメトリック指名得点					
L得点	1.18(0.91)	-0.83(0.30)	-0.23(0.36)	-0.73(0.37)	1.10(0.94)
D得点	-0.65(0.19)	1.51(1.15)	-0.17(0.38)	-0.57(0.25)	0.88(0.83)
S P得点	1.82(0.91)	-2.35(1.22)	-0.06(0.58)	-0.15(0.57)	0.21(1.66)
S I得点	0.53(0.95)	0.68(1.16)	-0.39(0.46)	-1.30(0.28)	1.98(0.65)
肯定相互選択数	1.52(0.80)	0.44(0.58)	0.92(0.62)	0.29(0.55)	1.80(1.17)
否定相互選択数	0.03(0.18)	0.39(0.64)	0.03(0.16)	0.05(0.21)	0.20(0.40)
(2)ソシオメトリック評定得点					
平均評定値	2.55(0.20)	1.84(0.23)	2.26(0.26)	2.28(0.25)	2.32(0.27)
相互選択数(3)	6.55(3.25)	3.22(1.47)	4.08(2.92)	3.05(2.34)	4.80(2.93)
相互選択数(2)	1.94(2.00)	1.74(1.42)	2.50(2.52)	2.86(2.85)	1.80(1.60)
相互選択数(1)	0.42(0.91)	2.00(1.89)	0.84(1.31)	0.71(0.82)	1.20(0.75)
(3)仲間知覚尺度得点					
A尺度	-0.33(0.51)	1.06(1.43)	-0.35(0.34)	-0.42(0.33)	1.21(1.50)
C尺度	0.75(1.06)	-0.51(0.47)	-0.29(0.55)	-0.47(0.23)	1.13(1.86)
W尺度	-0.30(0.82)	0.40(1.19)	0.01(0.86)	0.12(1.17)	-0.18(0.50)
(4)自己知覚尺度得点					
A尺度	3.74(1.24)	4.26(1.51)	4.13(1.17)	3.95(0.90)	4.00(2.00)
C尺度	6.71(1.20)	6.65(1.34)	6.18(1.64)	6.43(1.26)	4.80(1.17)
W尺度	5.19(1.61)	4.48(1.28)	5.26(1.77)	5.67(1.61)	5.20(1.33)
(5)孤独感得点	14.36(2.42)	15.96(3.47)	15.92(3.64)	17.86(4.45)	17.20(4.07)
(6)自己知覚の正確度得点 (自己-仲間のズレ得点)					
A尺度	0.11(0.82)	-0.83(1.40)	0.39(0.83)	0.39(0.81)	-1.07(1.36)
C尺度	-0.52(1.33)	0.71(1.13)	0.13(1.27)	0.48(0.92)	-2.25(1.64)
W尺度	0.32(1.10)	-0.82(1.34)	0.06(1.45)	0.20(1.67)	0.21(0.91)

A:攻撃性 C:社会的コンピテンス W:引っ込み思案

男女別の4地位群間比較

表5と表6は、男女別の人数に基づいて、得点別に各地位群の平均値とSDを示したものである。得点別に両論児群を除く4地位群間で平均値の有意差検定を行った。分散の群間等質性が保証されるときには2(性別)×4(群)の2要因の分散分析を適用した後、Duncan法を使用して各群間の差を検定した。なお、群の主効果に対応する各群の平均値は表4に示すとおりである。分散の群間等質性が保証されないときにはWelch法を含むt検定を使用して男女別に各群間の差および各群の男女差を検定し、その結果をまとめて報告する。

(1)ソシオメトリック指名得点：平均値比較の結果をまとめると、L得点の男子では人気児群が他の3群よりも(いずれも $p < .001$)、平均児群が無視児群や拒否児群よりも(順に $p < .05$, $p < .001$)有意に多かった。女子でも人気児群が他の3群よりも(いずれも $p < .001$)、平均児群が拒否児群や無視児群よりも(いずれも $p < .001$)有意に多かった。各群別に男女間の比較をしたところ、平均児群では女子が男子よりも有意に多かった($p < .05$)が、他の3群の性差は有意でなかった。D得点の男子では拒否児群が他の3群よりも(拒>平は $p < .002$; 他は $p < .001$)、平均児群が人気児群や無視児群よりも(いずれも $p < .001$)有意に多かった。

女子では拒否児群が他の3群よりも(いずれも $p < .001$), 平均児群が人気児群よりも ($p < .001$) 有意に多かった。各群別に男女間の比較をしたところ, 人気児群では男子が女子よりも有意に多かった ($p < .05$) が, 他の3群の性差は有意でなかった。SP得点の男子では人気児群が他の3群よりも(いずれも $p < .001$), 無視児群や平均児群が拒否児群よりも(いずれも $p < .001$) 有意に多かった。女子でも人気児群が他の3群よりも(いずれも $p < .001$), 平均児群や無視児群が拒否児群よりも(いずれも $p < .001$) 有意に多かった。各群別に男女間の比較をしたところ, いずれの群でも性差は有意でなかった。SI得点の男子では拒否児群や人気児群がそれぞれ平均児群や無視児群よりも(拒>平は $p < .02$; 人>平は $p < .002$; 他は $p < .001$), 平均児群が無視児群よりも ($p < .001$) 有意に多かった。女子でも拒否児群や人気児群がそれぞれ平均児群や無視児群よりも(拒>平は $p < .02$; 人>平は $p < .01$; 他は $p < .001$), 平均児群が無視児群よりも ($p < .001$) 有意に多かった。各群別に男女間の比較をしたところ, いずれの群でも性差は有意でなかった。

肯定相互選択数では2(性別)×4(群)の分散分析を行った。その結果, 群の主効果が $F(3, 105) = 22.20$, $p < .001$ で有意となり, 人気児群が他の3群よりも, 平均児群が拒否児群や無視児群よりも有意に多かった(いずれも $p < .01$)。また, 性別×群の交互作用も $F(3, 105) = 5.57$, $p < .005$ で有意となり, 男子では人気児群が他の3群よりも有意に多かった(いずれも $p < .01$)。女子では平均児群や人気児群がそれぞれ拒否児群や無視児群よりも有意に多かった(平>拒と人>拒は $p < .05$; 他は $p < .01$)。各群別に男女間の比較をしたところ, 人気児群では男子が女子よりも ($p < .01$), 平均児群では女子が男子よりも ($p < .05$) 有意に多かったが, 他の2群の性差は有意でなかった。否定相互選択数の男子では拒否児群が人気児群や平均児群よりも有意に多かった(いずれも $p < .05$)。女子では拒否児群を除く他の3群の平均値とSDが共に0であったので, 群間比較ができなかった。なお拒否児群のみについては男女間の比較をしたが, 性差は有意でなかった。

(2)ソシオメトリック評定得点: 平均評定値では2(性別)×4(群)の分散分析を行った。その結果, 性別の主効果が $F(1, 105) = 4.08$, $p < .05$ で有意となり, 女子($M=2.30$)が男子($M=2.22$)よりも有意に多かった。また, 群の主効果が $F(3, 105) = 41.49$, $p < .001$ で有意となり, 人気児群が他の3群よりも有意に多く, 拒否児群が他の3群よりも有意に少なかった(いずれも $p < .01$)。相互選択数(3)の男子では人気児群が他の3群よりも(人>平は $p < .01$; 他は $p < .001$), 平均児群が拒否児群よりも ($p < .02$) 有意に多かった。女子でも人気児群が他の3群よりも有意に多かった(いずれも $p < .05$)。各群別に男女間の比較をしたところ, いずれの群でも性差は有意でなかった。相互選択数(2)では2(性別)×4(群)の分散分析を行ったが, いずれの主効果も交互作用も有意でなかった。相互選択数(1)の男子では拒否児群が平均児群や人気児群よりも有意に多かった(いずれも $p < .05$)。女子では拒否児群が他の3群よりも有意に多かった(拒>人は $p < .02$; 他は $p < .05$)。各群別に男女間の比較をしたところ, いずれの群でも性差は有意でなかった。

(3)仲間知覚尺度得点: A尺度得点の男子では, 拒否児群が平均児群や無視児群よりも有意に多かった(いずれも $p < .05$)。女子でも拒否児群が他の3群よりも有意に多かった(拒>平は $p < .002$; 他は $p < .001$)。各群別に男女間の比較をしたところ, 人気児群では男子が女子よりも有意に多かった ($p < .05$) が, 他の3群の性差は有意でなかった。C尺度得点の男子では人気児群が平均児群, 無視児群, 拒否児群の3群よりも有意に多かった(順に $p < .01$, p

表5 各得点の地位群別平均値(SD)男女別

得点	男 子				女 子			
	人気児 (N=15)	拒否児 (N=10)	平均児 (N=21)	無視児 (N=11)	人気児 (N=16)	拒否児 (N=13)	平均児 (N=17)	無視児 (N=10)
(1)ソシオメトリック指名得点								
L得点	1.16 (0.85)	-0.88 (0.29)	-0.33 (0.33)	-0.63 (0.33)	1.19 (0.97)	-0.80 (0.31)	-0.10 (0.36)	-0.84 (0.39)
D得点	-0.58 (0.21)	1.77 (1.24)	-0.13 (0.33)	-0.63 (0.19)	-0.71 (0.14)	1.32 (1.04)	-0.21 (0.42)	-0.51 (0.29)
SP得点	1.74 (0.81)	-2.64 (1.25)	-0.20 (0.47)	0.01 (0.48)	1.91 (0.98)	-2.12 (1.15)	0.11 (0.65)	-0.33 (0.60)
SI得点	0.58 (0.93)	0.89 (1.30)	-0.46 (0.47)	-1.26 (0.23)	0.48 (0.97)	0.52 (1.02)	-0.31 (0.43)	-1.35 (0.33)
肯定相互選択数	1.87 (0.88)	0.20 (0.40)	0.67 (0.56)	0.36 (0.64)	1.19 (0.53)	0.62 (0.62)	1.24 (0.55)	0.20 (0.40)
否定相互選択数	0.07 (0.25)	0.60 (0.66)	0.05 (0.21)	0.09 (0.29)	0.00 (0.00)	0.23 (0.58)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)
(2)ソシオメトリック評定得点								
平均評定値	2.51 (0.22)	1.82 (0.30)	2.17 (0.23)	2.26 (0.26)	2.60 (0.17)	1.86 (0.15)	2.37 (0.25)	2.31 (0.24)
相互選択数(3)	7.73 (3.51)	2.60 (1.11)	4.57 (2.92)	2.91 (2.11)	5.44 (2.52)	3.69 (1.54)	3.47 (2.81)	3.20 (2.56)
相互選択数(2)	1.33 (1.81)	1.80 (1.33)	2.29 (2.39)	2.55 (2.61)	2.50 (2.00)	1.69 (1.49)	2.77 (2.65)	3.20 (3.06)
相互選択数(1)	0.60 (1.08)	2.70 (2.19)	1.10 (1.60)	1.00 (0.85)	0.25 (0.66)	1.46 (1.39)	0.53 (0.70)	0.40 (0.66)

<.005, $p < .002$)。女子でも人気児群が他の3群よりも有意に多かった(人>平は $p < .002$; 他は $p < .001$)。各群別に男女間の比較をしたところ、いずれの群でも性差は有意でなかった。W尺度得点の男子では4群間の差は有意でなかった。女子では拒否児群が人気児群よりも有意に多かった($p < .05$)。各群別に男女間の比較をしたところ、いずれの群でも性差は有意でなかった。

(4)自己知覚尺度得点：A尺度得点では男子の4群間にも女子の4群間にも有意差はなかった。各群別に男女間の比較をしたところ、平均児群では男子が女子よりも有意に多かった($p < .01$)が、他の3群の性差は有意でなかった。C尺度得点では2(性別)×4(群)の分散分析を行ったが、いずれの主効果も交互作用も有意でなかった。W尺度得点では2(性別)×4(群)の分散分析の結果、群の主効果が $F(3, 105) = 2.31$, $p < .10$ で有意傾向を示した。念のため多重比較をしたところ、無視児群が拒否児群よりも多い傾向にあった。

(5)孤独感得点：孤独感得点の男子では4群間の差は有意でなかった。しかし、女子では人気児群が無視児群、平均児群、拒否児群の3群よりも有意に少なかった(順に $p < .001$, $p < .01$, $p < .05$)。各群別に男女間の比較をしたところ、いずれの群でも性差は有意でなかった。

(6)自己知覚の正確度得点：A尺度のズレ得点の男子では、平均児群や無視児群が拒否児群よりも有意に多かった(順に $p < .001$, $p < .05$)。女子では無視児群や人気児群が拒否児群よりも有意に多かった(順に $p < .02$, $p < .05$)。各群別に男女間の比較をしたところ、いずれの群でも性差は有意でなかった。C尺度のズレ得点では2(性別)×4(群)の分散分析の結果、群の主効果が $F(3, 105) = 4.95$, $p < .005$ で有意であった。多重比較の結果、拒否児群や無

視児群が人気児群よりも有意に多かった(いずれも $p < .01$)。W尺度のズレ得点でも2(性別) \times 4(群)の分散分析を行った。その結果, 群の主効果が $F(3, 105) = 3.26$, $p < .05$ で有意となり, 拒否児群が他の3群よりも有意に少なかった(いずれも $p < .05$)。また, 性別 \times 群の交互作用が $F(3, 105) = 2.30$, $p < .10$ で有意傾向を示した。念のため多重比較をしたところ, 男子の4群間差は有意でなかったが, 女子では拒否児群が他の3群よりも少ない傾向にあった。各群別に男女間の比較をしたところ, 拒否児群では男子が女子よりも多い傾向にあったが, 他の3群の性差は有意でなかった。

表6 各得点の地位群別平均値(SD)男女別

得点	男 子				女 子			
	人気児 (N=15)	拒否児 (N=10)	平均児 (N=21)	無視児 (N=11)	人気児 (N=16)	拒否児 (N=13)	平均児 (N=17)	無視児 (N=10)
(3)仲間知覚尺度得点								
A尺度	-0.13 (0.63)	1.06 (1.72)	-0.30 (0.32)	-0.38 (0.28)	-0.53 (0.23)	1.06 (1.17)	-0.40 (0.35)	-0.47 (0.37)
C尺度	0.66 (1.07)	-0.55 (0.38)	-0.29 (0.45)	-0.42 (0.22)	0.84 (1.04)	-0.48 (0.52)	-0.29 (0.66)	-0.51 (0.22)
W尺度	-0.25 (1.06)	0.04 (0.82)	0.11 (0.88)	0.17 (1.27)	-0.36 (0.51)	0.67 (1.35)	-0.11 (0.81)	0.06 (1.05)
(4)自己知覚尺度得点								
A尺度	4.00 (1.55)	4.60 (1.85)	4.57 (1.26)	4.00 (1.04)	3.50 (0.79)	4.00 (1.11)	3.59 (0.77)	3.90 (0.70)
C尺度	6.73 (1.12)	6.60 (1.36)	6.57 (1.65)	6.55 (1.56)	6.69 (1.26)	6.69 (1.32)	5.71 (1.49)	6.30 (0.78)
W尺度	5.60 (1.74)	4.90 (1.37)	5.05 (1.65)	5.27 (1.96)	4.81 (1.38)	4.15 (1.10)	5.53 (1.88)	6.10 (0.94)
(5)孤独感得点	15.07 (2.35)	16.10 (4.11)	15.24 (3.73)	17.55 (5.50)	13.69 (2.28)	15.85 (2.88)	16.77 (3.35)	18.20 (2.86)
(6)自己知覚の正確度得点(自己-仲間のズレ得点)								
A尺度	-0.05 (0.93)	-0.82 (0.98)	0.53 (0.86)	0.21 (0.80)	0.26 (0.67)	-0.84 (1.65)	0.22 (0.76)	0.59 (0.78)
C尺度	-0.52 (1.21)	0.59 (1.09)	0.31 (1.09)	0.43 (1.14)	-0.53 (1.44)	0.79 (1.14)	-0.10 (1.42)	0.54 (0.60)
W尺度	0.49 (1.32)	-0.21 (1.22)	-0.19 (1.39)	-0.12 (1.92)	0.15 (0.81)	-1.30 (1.23)	0.35 (1.46)	0.55 (1.24)

A:攻撃性 C:社会的コンピテンス W:引っ込み思案

仲間知覚尺度得点に基づく7下位群間の比較

表7と表8は, 得点別に7つの下位群の平均値とSDを示したものである。下位群間比較では同一地位群の下位群に典型的な平均児群(T平群)を加えて, 得点別に1要因分散分析を行った。下位群間の分散等質性が保証されないときは, Welch法を含むt検定を使用し, 各下位群とT平群間の比較および各下位群間の比較(C高群とC低群間の比較, A拒群とW拒群間の比較, W高群とW低群間の比較)を行い, それらの結果についてまとめて報告する。

(1)ソシオメトリック指名得点:L得点ではC高群やC低群がT平群よりも有意に多く(いずれも $p < .001$), W低群, W高群およびA拒群の3群がT平群よりも有意に少なかった(順に

p < .005, p < .005, p < .001)。また, C高群がC低群よりも, W拒群がA拒群よりもそれぞれ有意に多かった(いずれも p < .05)。D得点ではA拒群やW拒群がT平群よりも有意に多く(順に p < .001, p < .02), W低群, C低群およびC高群の3群がT平群よりも有意に少なかった(順に p < .001, p < .002, p < .001)。なお, 同一下位群間の差はすべて有意でなかった。SP得点ではC高群やC低群がT平群よりも有意に多く(いずれも p < .001), W拒群やA拒群がT平群よりも有意に少なかった(いずれも p < .001)。また, C高群がC低群よりも有意に多かった(p < .05)。SI得点ではA拒群, C高群, C低群の3群がそれぞれT平群よりも有意に多く(順に p < .01, p < .001, p < .01), W高群やW低群がT平群よりも有意に少なかった(いずれも p < .001)。また, C高群がC低群よりも有意に多かった(p < .05)。

肯定相互選択数では群の主効果が F(6, 81) = 7.26, p < .001で有意となり, C高群がW拒群よりも(p < .05), C高群やC低群がそれぞれW高群, W低群, A拒群の3群よりも有意に多かった(C低群 > W高群とC低群 > W低群は p < .05; 他は p < .01)。また, A拒群がT平群よりも有意に少なかった(p < .05)。否定相互選択数ではA拒群, W拒群, W高群, C高群の4群間の比較をしたが, いずれの群間差も有意でなかった。

(2)ソシオメトリック評定得点: 平均評定値では群の主効果が F(6, 81) = 24.59, p < .001で有意となった。多重比較の結果, C高群がC低群を除く他の5群よりも(C高群 > W低群は p < .05; 他は p < .01), C低群がT平群, W高群, A拒群, W拒群の4群よりも(C低群 > T平群は p < .05; 他は p < .01), W低群がW高群, A拒群, W拒群の3群よりも(W低群 > W高群は p < .05; 他は p < .01), T平群やW高群がA拒群やW拒群よりも(いずれも p < .01)

表7 各得点の下位群別平均値(SD)

得点	人気児		拒否児		平均児	無視児	
	C高群 (N=16)	C低群 (N=9)	A拒群 (N=11)	W拒群 (N=5)	T平群 (N=30)	W高群 (N=5)	W低群 (N=12)
(1)ソシオメトリック指名得点							
L得点	1.44 (1.10)	0.69 (0.39)	-0.93 (0.25)	-0.55 (0.30)	-0.24 (0.37)	-0.86 (0.47)	-0.64 (0.33)
D得点	-0.66 (0.19)	-0.65 (0.17)	1.89 (1.30)	1.42 (0.71)	-0.23 (0.35)	-0.42 (0.28)	-0.65 (0.22)
SP得点	2.10 (1.11)	1.34 (0.31)	-2.82 (1.40)	-1.97 (0.71)	-0.01 (0.58)	-0.44 (0.75)	0.01 (0.44)
SI得点	0.78 (1.12)	0.03 (0.52)	0.96 (1.25)	0.87 (0.83)	-0.46 (0.42)	-1.27 (0.19)	-1.29 (0.34)
肯定相互選択数	1.50 (0.61)	1.11 (0.87)	0.18 (0.39)	0.80 (0.40)	0.93 (0.57)	0.40 (0.80)	0.33 (0.47)
否定相互選択数	0.06 (0.24)	0.00 (0.00)	0.55 (0.78)	0.20 (0.40)	0.00 (0.00)	0.20 (0.40)	0.00 (0.00)
(2)ソシオメトリック評定得点							
平均評定値	2.64 (0.16)	2.49 (0.22)	1.82 (0.23)	1.73 (0.12)	2.27 (0.20)	2.13 (0.30)	2.40 (0.19)
相互選択数(3)	7.13 (3.12)	6.67 (3.16)	3.64 (1.72)	3.00 (1.41)	4.00 (2.89)	2.80 (2.48)	2.67 (2.17)
相互選択数(2)	2.31 (1.93)	1.22 (1.87)	1.64 (1.37)	1.20 (1.60)	2.63 (2.64)	1.60 (1.62)	3.00 (2.80)
相互選択数(1)	0.44 (0.70)	0.22 (0.63)	2.18 (1.90)	2.40 (1.36)	0.70 (0.90)	0.60 (0.80)	0.75 (0.83)

それぞれ有意に多かった。相互選択数(3)でも群の主効果が $F(6, 81) = 5.05$, $p < .001$ で有意となり、C高群やC低群がそれぞれ他の5群よりも有意に多かった (C高群 > T平群, C高群 > A拒群, C低群 > T平群, C低群 > A拒群, C低群 > W拒群は $p < .05$; 他は $p < .01$)。相互選択数(2)では群の主効果が有意でなかった。相互選択数(1)ではW拒群やA拒群がそれぞれT平群よりも有意に多かった (順に $p < .002$, $p < .05$) が、他の群とT平群間の差および同一下位群間の差は有意でなかった。

(3)仲間知覚尺度得点：A尺度得点ではA拒群がW拒群やT平群よりも有意に多かった (いずれも $p < .001$)。C尺度得点ではC高群がC低群やT平群よりも有意に多かった (いずれも $p < .001$)。W尺度得点ではW高群がT平群よりも有意に多く ($p < .05$)、C高群やW低群がT平群よりも有意に少なかった (順に $p < .05$, $p < .001$)。また、W高群がW低群よりも有意に多かった ($p < .02$)。

(4)自己知覚尺度得点：3つの尺度得点とも群の主効果は有意でなかった。

(5)孤独感得点：群の主効果が $F(6, 81) = 3.06$, $p < .01$ で有意となり、W高群が他の6群よりも有意に多かった (いずれも $p < .01$)。

(6)自己知覚の正確度得点：A尺度のズレ得点では群の主効果が $F(6, 81) = 4.27$, $p < .001$ で有意となり、A拒群が他の6群よりも有意に少なかった (いずれも $p < .01$)。C尺度のズレ得点でも群の主効果が $F(6, 81) = 6.62$, $p < .001$ で有意となり、A拒群がT平群, W拒群お

表8 各得点の下位群別平均値(SD)

得点	人 気 児		拒 否 児		平均児	無 視 児	
	C高群 (N=16)	C低群 (N=9)	A拒群 (N=11)	W拒群 (N=5)	T平群 (N=30)	W高群 (N=5)	W低群 (N=12)
(3)仲間知覚尺度得点							
A尺度	-0.41 (0.56)	-0.20 (0.51)	2.04 (1.22)	-0.37 (0.21)	-0.38 (0.30)	-0.53 (0.11)	-0.36 (0.35)
C尺度	1.55 (0.84)	-0.32 (0.30)	-0.66 (0.36)	-0.56 (0.33)	-0.39 (0.38)	-0.58 (0.24)	-0.42 (0.23)
W尺度	-0.57 (0.41)	-0.35 (0.68)	-0.13 (0.37)	1.98 (1.40)	-0.22 (0.50)	1.92 (0.96)	-0.66 (0.22)
(4)自己知覚尺度得点							
A尺度	3.75 (1.48)	3.78 (0.92)	5.00 (1.65)	4.00 (1.10)	4.20 (1.14)	3.60 (0.80)	4.00 (0.91)
C尺度	6.88 (1.22)	6.33 (1.05)	7.27 (1.29)	5.60 (0.80)	6.07 (1.53)	6.40 (1.62)	6.17 (0.80)
W尺度	5.19 (1.74)	4.44 (1.26)	4.46 (1.50)	4.40 (1.20)	5.17 (1.66)	5.40 (2.06)	6.17 (1.28)
(5)孤独感得点							
	13.81 (2.43)	15.00 (2.67)	16.36 (3.84)	16.40 (2.25)	15.93 (3.94)	21.40 (5.68)	16.75 (2.71)
(6)自己知覚の正確度得点 (自己-仲間のズレ得点)							
A尺度	0.16 (0.86)	0.06 (0.77)	-1.19 (1.51)	0.32 (0.56)	0.49 (0.84)	0.18 (0.67)	0.36 (0.80)
C尺度	-1.20 (1.30)	0.29 (0.94)	1.33 (0.91)	0.02 (0.80)	0.15 (1.05)	0.56 (1.20)	0.27 (0.65)
W尺度	0.57 (1.11)	-0.08 (1.04)	-0.31 (0.84)	-2.44 (0.94)	0.23 (1.21)	-1.76 (1.46)	1.28 (0.90)

A:攻撃性 C:社会的コンピテンス W:引っ込み思案

よびC高群の3群よりも有意に多く(順に $p < .05$, $p < .05$, $p < .01$), C高群が他の6群よりも有意に少なかった(T平群 > C高群とW拒群 > C高群は $p < .05$; 他は $p < .01$)。W尺度のズレ得点でも群の主効果が $F(6, 81) = 9.22$, $p < .001$ で有意となり, W低群がC低群, A拒群, W高群, W拒群の4群よりも有意に多く, W高群やW拒群が他の5群よりも有意に少なかった(W低群 > C低群は $p < .05$; 他は $p < .01$)。

相互選択数に基づく6下位群間の比較

表9と表10は, 得点別に6つの下位群の平均値とSDを示したものである。下位群間比較では同一地位群の下位群に平均児I群を加えて, 得点別に1要因分散分析を行った。下位群間の分散等質性が保証されないときは, Welch法を含むt検定を使用して, 各下位群と平均児I群間の比較および各下位群間比較(拒否児I群, 拒否児II群および拒否児III群の3群間比較, 無視児I群と無視児II群の2群間比較)を行い, それらの結果についてまとめて報告する。

(1)ソシオメトリック指名得点: L得点では群の主効果が $F(5, 67) = 10.60$, $p < .001$ で有意となり, 拒否児III群, 無視児I群, 拒否児I群, 拒否児II群の4群が平均児I群よりも有意に少なかった(平均児I群 > 拒否児III群は $p < .05$; 他は $p < .01$)。また, 無視児II群が拒否児I群よりも($p < .05$)有意に多く, 拒否児II群が無視児II群, 拒否児III群, 無視児I群よりも有意に少なかった(いずれも $p < .01$)。D得点では拒否児II群, 拒否児I群, 拒否児III群の3群が平均児I群よりも有意に多く(順に $p < .05$, $p < .02$, $p < .005$), 無視児I群や無視児II群が平均児I群よりも有意に少なかった(順に $p < .001$, $p < .02$)。しかし, 拒否児の3つの下位群間差および無視児の2つの下位群間差はいずれも有意でなかった。SP得点では拒否児III群, 拒否児I群, 拒否児II群の3群が平均児I群よりも有意に少なかった(順に $p < .001$, $p < .005$, $p < .01$)。また, 拒否児III群が拒否児II群よりも有意に多かった($p < .05$)。

表9 各得点の下位群別平均値(SD)

得点	拒否児			平均児	無視児	
	I群 (N=8)	II群 (N=6)	III群 (N=8)	I群 (N=31)	I群 (N=15)	II群 (N=5)
(1)ソシオメトリック指名得点						
L得点	-0.87 (0.21)	-1.13 (0.15)	-0.64 (0.25)	-0.31 (0.33)	-0.78 (0.38)	-0.51 (0.26)
D得点	1.50 (1.21)	2.01 (1.29)	1.02 (0.73)	-0.16 (0.38)	-0.57 (0.25)	-0.63 (0.23)
SP得点	-2.37 (1.24)	-3.13 (1.29)	-1.66 (0.74)	-0.15 (0.57)	-0.21 (0.58)	0.12 (0.45)
SI得点	0.63 (1.22)	0.88 (1.31)	0.38 (0.81)	-0.47 (0.43)	-1.35 (0.30)	-1.14 (0.20)
(2)ソシオメトリック評定得点						
平均評定値	1.90 (0.29)	1.82 (0.21)	1.81 (0.14)	2.23 (0.26)	2.22 (0.25)	2.41 (0.19)
相互選択数 ⁽³⁾	3.13 (1.83)	3.33 (0.75)	3.13 (1.54)	3.94 (2.91)	3.53 (2.09)	2.20 (2.56)
相互選択数 ⁽²⁾	2.38 (1.32)	1.50 (1.38)	1.50 (1.32)	2.39 (2.55)	2.93 (3.07)	3.00 (2.28)
相互選択数 ⁽¹⁾	1.13 (1.17)	3.83 (2.03)	1.25 (1.20)	0.87 (1.29)	0.67 (0.79)	1.00 (0.89)

S I 得点では拒否児Ⅲ群が平均児 I 群よりも有意に多く ($p < .05$), 無視児Ⅱ群や無視児 I 群が平均児 I 群よりも有意に少なかった (順に $p < .005$, $p < .001$)。

(2)ソシオメトリック評定得点：平均評定値では群の主効果が $F(5, 67) = 8.14$, $p < .001$ で有意となり, 無視児Ⅱ群, 平均児 I 群, 無視児 I 群の 3 群がそれぞれ拒否児の 3 つの下位群よりも有意に多かった (平均児 I 群 > 拒否児 I 群と無視児 I 群 > 拒否児 I 群は $p < .05$; 他は $p < .01$)。相互選択数(3)では, いずれの群間差も有意でなかった。相互選択数(2)では群の主効果が有意でなかった。相互選択数(1)では群の主効果が $F(5, 67) = 5.90$, $p < .001$ で有意となり, 拒否児Ⅱ群が他の 5 群よりも有意に多かった (いずれも $p < .01$)。

(3)仲間知覚尺度得点：A 尺度得点では拒否児Ⅱ群や拒否児 I 群が平均児 I 群よりも有意に多かった (順に $p < .05$, $p < .02$)。C 尺度得点では, いずれの群間差も有意でなかった。W 尺度得点では拒否児Ⅲ群が拒否児 I 群よりも有意に多かった ($p < .05$)。

(4)自己知覚尺度得点：A 尺度得点ではいずれの群間差も有意でなかった。C 尺度得点では群の主効果が有意でなかった。W 尺度得点では群の主効果が $F(5, 67) = 3.01$, $p < .05$ で有意となり, 無視児 I 群が拒否児Ⅱ群や拒否児Ⅲ群よりも有意に多かった。

(5)孤独感得点：群の主効果は有意でなかった。

(6)自己知覚の正確度得点：A 尺度のズレ得点では群の主効果が $F(5, 67) = 6.04$, $p < .001$ で有意となり, 無視児Ⅱ群や平均児 I 群がそれぞれ拒否児の 3 つの下位群よりも有意に多かつ

表10 各得点の下位群別平均値(SD)

得点	拒否児			平均児	無視児	
	I 群 (N=8)	II 群 (N=6)	III 群 (N=8)	I 群 (N=31)	I 群 (N=15)	II 群 (N=5)
(3)仲間知覚尺度得点						
A 尺度	1.22 (1.29)	1.84 (1.63)	0.46 (1.12)	-0.38 (0.28)	-0.44 (0.30)	-0.36 (0.41)
C 尺度	-0.64 (0.37)	-0.44 (0.40)	-0.45 (0.58)	-0.39 (0.42)	-0.51 (0.17)	-0.39 (0.31)
W 尺度	-0.18 (0.77)	-0.05 (0.40)	1.22 (1.47)	-0.02 (0.74)	0.09 (1.12)	0.10 (1.39)
(4)自己知覚尺度得点						
A 尺度	4.50 (1.32)	4.67 (2.05)	3.50 (0.71)	4.23 (1.18)	3.80 (0.75)	4.60 (1.02)
C 尺度	6.75 (1.39)	7.17 (1.21)	6.25 (1.30)	6.16 (1.50)	6.53 (1.31)	6.00 (1.10)
W 尺度	5.13 (1.54)	4.33 (0.75)	3.88 (1.05)	5.10 (1.67)	6.20 (1.47)	4.60 (1.02)
(5)孤独感得点						
	16.88 (4.23)	14.50 (2.87)	16.00 (2.83)	15.87 (3.77)	18.00 (4.60)	17.60 (4.41)
(6)自己知覚の正確度得点 (自己-仲間のズレ得点)						
A 尺度	-0.71 (1.53)	-1.47 (0.98)	-0.74 (1.31)	0.48 (0.86)	0.30 (0.68)	0.82 (1.09)
C 尺度	0.90 (0.99)	0.94 (1.17)	0.42 (1.19)	0.21 (1.00)	0.61 (0.93)	0.10 (0.90)
W 尺度	0.15 (1.33)	-0.46 (0.36)	-2.01 (0.89)	-0.01 (1.25)	0.55 (1.47)	-0.43 (1.91)

A : 攻撃性 C : 社会的コンピテンス W : 引っ込み思案

た（平均児Ⅰ群>拒否児Ⅰ群と平均児Ⅰ群>拒否児Ⅲ群は $p < .05$ ；他は $p < .01$ ）。また，無視児Ⅰ群が拒否児Ⅱ群よりも有意に多かった（ $p < .01$ ）。C尺度のズレ得点では群の主効果が有意でなかった。W尺度のズレ得点では平均児Ⅰ群，拒否児Ⅰ群，拒否児Ⅱ群の3群が拒否児Ⅲ群よりも有意に多かった（順に $p < .001$ ， $p < .005$ ， $p < .005$ ）。

相関係数

表11は，ソシオメトリック地位得点として指名法のL得点，D得点，SP得点，SI得点および評定法の平均評定値を使用し，それぞれと各得点とのPearson積率相関係数をまとめたものである。表11から，L得点や平均評定値は肯定相互選択数や相互選択数(3)と有意な正相関を示し，否定相互選択数や相互選択数(1)と負相関の関係にあることがわかる。これは，仲間から好かれ受容されている子どもほど，肯定的指名の相互選択数や評定値3の相互選択数が多く，否定的指名の相互選択数や評定値1の相互選択数が少ない関係にあることを示しており，指名法のL得点や平均評定値による仲間関係の指標と相互選択数に基づく友人関係の指標がかなり関連している可能性を示唆している。

全般に，5つの地位得点は仲間知覚尺度得点と有意な相関を多く示しているが，自己知覚のA尺度得点を除く他の自己知覚尺度得点や孤独感得点とはそれほど明確な相関を示していない。このことから，仲間内地位は社会的行動特徴に関する仲間知覚とは関連するが，自己知覚

表11 ソシオメトリック地位得点と各得点との相関係数 (N=118)

	ソシオメトリック地位得点				
	L得点	D得点	SP得点	SI得点	平均評定値
(1)指名法の得点					
L得点		-.363**	.825**	.561**	.621**
D得点			-.827**	.568**	-.671**
SP得点				-.006	.783**
SI得点					-.047
肯定相互選択数	.641**	-.242*	.535**	.351**	.398**
否定相互選択数	-.168+	.502**	-.407**	.298**	-.246*
(2)評定法の得点					
相互選択数(3)	.451**	-.158	.368**	.259**	.380**
相互選択数(2)	-.019	-.073	.033	-.081	.056
相互選択数(1)	-.264**	.384**	-.393**	.107	-.430**
(3)仲間知覚尺度得点					
A尺度	-.163	.696**	-.521**	.474**	-.452**
C尺度	.679**	-.258**	.567**	.371**	.561**
W尺度	-.196*	.178+	-.227*	-.015	-.450**
(4)自己知覚尺度得点					
A尺度	-.042	.308**	-.213*	.236*	-.218*
C尺度	-.062	.038	-.061	-.021	-.079
W尺度	.106	-.123	.139	-.015	.101
(5)孤独感得点	-.188+	.030	-.132	-.139	-.160
(6)自己-仲間のズレ得点					
A尺度	.091	-.339**	.261**	-.220*	.218*
C尺度	-.512**	.205*	-.434**	-.271**	-.435**
W尺度	.210*	-.212*	.256**	-.003	.386**

A：攻撃性 C：社会的コンピテンス W：引っ込み思案 +： $p < .10$ *： $p < .05$ **： $p < .01$

や孤独感の自己報告とはあまり関連しないといえる。

表12は、仲間知覚と自己知覚の3つの尺度得点のそれぞれと各得点との Pearson 積率相関係数をまとめたものである。表12から、A尺度得点を除くと、全般に仲間知覚と自己知覚との対応関係は認められない。また、仲間知覚のW尺度得点は孤独感と有意な正相関を示しているが、自己知覚では3つの尺度得点とも孤独感と有意な相関を示している。仲間知覚と自己知覚の両方に共通しているのは、引っ込み思案傾向にある子どもほど、孤独感が強い関係にあることである。孤独感が自己報告測度であるためか、子ども自身の主観的な見方には全般に対応関係がみられ、自分を攻撃的で、社会的コンピテンスに乏しく、引っ込み思案であると見ている子どもほど、孤独感を強く報告する関係にあるといえる。

表12 仲間・自己知覚尺度得点と各得点との相関係数 (N=118)

	仲間知覚尺度得点			自己知覚尺度得点		
	A尺度	C尺度	W尺度	A尺度	C尺度	W尺度
(1)仲間知覚尺度得点						
A尺度		-.129	-.084	.378**	.052	-.072
C尺度			-.117	-.113	-.005	-.012
W尺度				-.106	-.027	-.020
(2)自己知覚尺度得点						
A尺度					-.036	.111
C尺度						.034
W尺度						
(3)孤独感得点	-.025	-.143	.211*	.219*	-.340**	.269**
(4)自己-仲間のズレ得点						
A尺度	-.557**	-.006	-.014	.532**	-.103	.158
C尺度	.125	-.693**	.058	.038	.721**	.029
W尺度	.006	.071	-.714**	.149	.038	.713**

A: 攻撃性 C: 社会的コンピテンス W: 引っ込み思案 +: $p < .10$ *: $p < .05$ **: $p < .01$

考 察

まず仲間知覚の結果について考察する。尺度得点別に各地位群の平均値順位(表4)をみると、攻撃性では両論児群(1位)と拒否児群(2位)が多く、人気児群(3位)、平均児群(4位)、無視児群(5位)の3群が少なかった。社会的コンピテンスでは両論児群(1位)と人気児群(2位)が多く、平均児群(3位)、無視児群(4位)、拒否児群(5位)が少なかった。引っ込み思案では拒否児群(1位)、無視児群(2位)、平均児群(3位)、両論児群(4位)、人気児群(5位)の順であったが、これら5群間には有意差がなかった。本研究の両論児群はわずか5名と少数であったためか、攻撃性や社会的コンピテンスの平均値は5群中最も多いと仲間から見られていたが、他の群との間に統計的な有意差はみられなかった。この点を考慮して、本研究では男女別に両論児を除く4群間比較(表6)も行った。その結果は男女共通して、攻撃性では拒否児群が、社会的コンピテンスでは人気児群がそれぞれ他の3群よりも有意に多く、5地位群間比較の結果とほぼ同様であった。ただし、引っ込み思案では女子の拒否児群が人気児群よりも多く、群全体としての5地位群間比較の結果と異なっていた。しかし、これら

の相違点を除けば、全般に仲間知覚の結果は、本研究よりも低年齢の幼児や高年齢の児童を対象とした以前の研究結果 (Coie & Dodge, 1988; 前田・片岡, 1993; 前田, 1995 a) とほぼ一致するものである。たとえば、幼稚園の年中児と年長児を対象とした前田・片岡 (1993) の攻撃性では両論児群 (1位), 拒否児群 (2位), 平均児群 (3位), 人気児群 (4位), 無視児群 (5位) の順であった。同様に、社会的コンピテンスでは人気児群 (1位), 両論児群 (2位), 平均児群 (3位), 無視児群 (4位), 拒否児群 (5位) の順であり、引っ込み思案では無視児群 (1位), 拒否児群 (2位), 平均児群 (3位), 人気児群 (4位), 両論児群 (5位) の順であった。また、小3～小6を対象とした前田 (1995 a) の攻撃性では拒否児群 (1位), 両論児群 (2位); 平均児群 (3位), 無視児群 (4位), 人気児群 (5位) の順であった。同様に、社会的コンピテンスでは人気児群 (1位), 両論児群 (2位), 平均児群 (3位), 無視児群 (4位), 拒否児群 (5位) の順であり、引っ込み思案では拒否児群 (1位), 無視児群 (2位), 平均児群 (3位), 人気児群 (4位), 両論児群 (5位) の順であった。群間の有意差の有無に多少の相違はあるものの、これらの研究結果は幼稚園児から小学高学年児にかけて、社会的行動特徴に対する仲間の見方が比較的一貫していることを示している。つまり、両論児や拒否児は無視児や人気児よりも攻撃的であり、両論児や人気児は無視児や拒否児よりも社会的コンピテンスが高く、無視児や拒否児は人気児や両論児よりも引っ込み思案であると仲間から見られる傾向にあった。この点で、本研究の小学1年生も仲間の社会的行動特徴を知覚する場合には、地位群間で異なる特徴を示すと明確に区別して知覚していることがわかる。さらに、本研究では仲間知覚に基づいて拒否児をさらに攻撃的な拒否児群と引っ込み思案な拒否児群の2つの下位群に、人気児をさらに社会的コンピテンスの高い人気児群と低い人気児群に、無視児を引っ込み思案傾向の高い無視児群と低い無視児群に分類したところ、それぞれの尺度得点において有意な下位群間差がみられた (表8)。これは、仲間知覚尺度得点に基づく下位群分類が可能であることを確認すると同時に、小学1年生が各地位群内の個人差をも区別して知覚できることを実証するものである。

次に自己知覚の結果について考察する。仲間知覚と比べると、小学1年生の自己知覚では地位群間に大きな差異はみられなかった。両論児群が他の4群よりも自己の社会的コンピテンスを過小評価する傾向にあったが、これを除けば、攻撃性でも引っ込み思案でも5地位群の自己知覚には有意差がなかった。ただし、男女別の4群間比較では、無視児群が拒否児群よりも引っ込み思案であると自覚する傾向にあった。自己知覚に関する本研究の結果は、小3～小6を対象とした前田 (1995 a) の結果と大きく異なる。前田 (1995 a) の自己知覚の結果も、仲間知覚の結果ほど顕著ではない。しかし、各地位群の子どもは自己の社会的行動特徴に関して、それぞれ異なる自己知覚を示していた。つまり、攻撃性の自己知覚では両論児群 (1位), 拒否児群 (2位), 平均児群 (3位), 無視児群 (4位), 人気児群 (5位) の順であり、社会的コンピテンスでは両論児群 (1位), 人気児群 (2位), 無視児群 (3位), 平均児群 (4位), 拒否児群 (5位) の順であり、引っ込み思案では無視児群 (1位), 拒否児群 (2位), 平均児群 (3位), 人気児群 (4位), 両論児群 (5位) の順であった。これらの平均値順位は、上述した前田 (1995 a) の仲間知覚の平均値順位と類似した傾向を示していることがわかる。攻撃性では拒否児群と両論児群が人気児群よりも、社会的コンピテンスでは両論児群や人気児群が拒否児群よりも、引っ込み思案では無視児群や拒否児群が人気児群よりも、それぞれ有意に多いと自己知覚していたのである。本研究と前田 (1995 a) の結果の相違点から、小学1年生で

は自己の社会的行動特徴をほとんど自覚していないので、地位群間差もみられないが、学年が進むにつれて次第に自覚できるようになると同時に、その見方も各地位群に対する仲間知覚と一致するようになると示唆される。地位群間比較（表4と表6）および仲間知覚を組み合わせた下位群比較（表8）の結果からみる限り、小学1年生では社会的行動特徴の仲間知覚と仲間関係は関連するが、自己知覚と仲間関係はほとんど関連しないと結論しなければならない。

最後に、孤独感の結果について考察する。孤独感得点の平均値順位は無視児群（1位）、両論児群（2位）、拒否児群（3位）、平均児群（4位）、人気児群（5位）の順となり、無視児群が最も多く、人気児群が最も少なかった。前田（1995a）では拒否児群（1位）、無視児群（2位）、平均児群（3位）、両論児群（4位）、人気児群（5位）であり、本研究と拒否児群や両論児群の順位が大きく異なる。つまり、本研究の小学1年生では無視児群や両論児群の孤独感が比較的強いのに対して、拒否児群の孤独感はそれほど強くなく、平均児群とほぼ同程度であった。特に、注目すべき点は引っ込み思案傾向にある仲間から見られている無視児の下位群（W高群）が最も強い孤独感を報告していることである（表8）。本研究と前田（1995a）の結果の相違点から、無視児群の孤独感は比較的早い学年から自覚される傾向にあるが、拒否児の孤独感は無視児群よりも少し遅れて自覚されるのではないかと示唆される。しかし、仲間関係と関連する孤独感は単なる自己知覚能力の年齢変化に依存するとは限らない。否定的な仲間関係を経験する程度が強かったり、仲間拒否の期間が長ければ、否応なく低年齢児でも孤独感を自覚するようになってしまうと考えられる。この解釈は、幼稚園の年中児から年長児にかけて一貫して仲間から拒否されている幼児ほど孤独感が強いことを見出した前田（1995c）の結果から支持される。

おそらく、本研究の小学1年生は小学校での仲間経験をスタートしたばかりであるため、拒否児といえども強い程度の仲間拒否を長期間にわたって受けていないので、仲間から拒否される自己の地位や社会的行動特徴に気づかないのであろう。表11の相関係数をみると、確かに拒否得点の高い子どもほど仲間から攻撃的であると見られ、自分でもある程度は攻撃的であると自覚している可能性が示唆される。しかし、そうした自己知覚の程度は仲間知覚に比べるとはるかに低く、地位群間比較（表4）や下位群間比較（表8）では顕著な群間差としてあらわれていない。むしろ、拒否児は攻撃的にかかわりをすると仲間から見られながらも、本人はそれほど自覚しないで仲間とかかわるために、仲間との相互作用の量や機会は無視児よりも多くなると考えた方が実態に適しているのではなからうか。そのため、拒否児は仲間拒否の結果として生じる孤独感を感じないで済むのかもしれない。それに対して、無視児は仲間との相互作用の量や機会が少なく、仲間とかかわっていない事実を自分でも自覚しやすいのではなからうか。この解釈は、本研究の以下の結果からもある程度裏づけられる。まず第1は表1からわかるように、肯定的指名の相互選択数も否定的指名の相互選択数も0である無視児I群（15名）は無視児群全体（21名）の約71.4%を占めていることである。第2に、この無視児I群は、肯定的指名または否定的指名の相互選択数の友人関係や対立関係をもつ拒否児II群や拒否児III群よりも引っ込み思案であると自己知覚していたことである。ところが、仲間は拒否児III群が最も引っ込み思案であると知覚している（表10）。第3に、仲間から攻撃的と見られている子どもよりも、仲間から引っ込み思案と見られている子どもほど、孤独感を感じる関係にあることである（表12）。

要するに、本研究の結果は、小学1年生がすでに仲間の社会的行動特徴をある程度分化して

知覚できるが、自己の社会的行動特徴については仲間関係の良否にかかわらず全般に自覚していないことを明らかにした。自己知覚と仲間知覚のズレ得点における地位群間差や下位群間差は、おそらく仲間知覚の地位群間差や下位群間差の影響を受けたものと考えられる。また、自己の孤独感には地位群間差や下位群間差がある程度みられることを考慮すると、小学1年生は自己の孤独感を自覚できても、それが仲間に対する自己の社会的行動と関連するという自覚に乏しいのかもしれない。仲間との関係が希薄であるという事実は仲間相互作用の量的側面から比較的自覚しやすいが、仲間との相互作用の質を仲間関係や孤独感と関連させて考えることは小学1年生にとって難しいのかもしれない。発達の・予防的観点からすると、仲間関係の結果としての孤独感を自覚し始める以前に、孤独感や仲間関係の問題をその原因あるいは関連要因と考えられる彼らの社会的行動の性質と結びつけた指導を行い、自己の対人行動や社会的スキルの特徴およびそれらの特徴が他者に与える影響について、子どもの自覚を高める必要がある。

要 約

本研究では小学1年生118名を対象にして、孤独感に関する自己報告測度および攻撃性、社会的コンピテンス、引っ込み思案の3つの社会的行動特徴次元に関する仲間知覚測度と自己知覚測度について地位群間比較と下位群間比較を行った。地位群間比較では、ソシオメトリック指名法に基づいて人気児群、拒否児群、平均児群、無視児群および両論児群の5つの地位群を分類し、5地位群間の比較を行うと同時に、男女別に両論児群を除く他の4群間の比較も行った。第1の下位群間比較では、社会的行動特徴に関する仲間知覚測度の結果を組み合わせ、人気児群を社会的コンピテンスの高いC高群と低いC低群の2下位群に、拒否児群を攻撃的なA拒群と引っ込み思案なW拒群の2下位群に、無視児群を引っ込み思案傾向の高いW高群と低いW低群の2下位群にそれぞれ分類し、各下位群と典型的な平均児群（T平群）との比較および同一地位群の下位群間比較を行った。第2の下位群間比較では、ソシオメトリック指名法の肯定的指名や否定的指名の相互選択数に基づいて拒否児群を拒否児Ⅰ群、拒否児Ⅱ群、拒否児Ⅲ群の3下位群に、無視児群を無視児Ⅰ群と無視児Ⅱ群の2下位群に分類し、各下位群と平均児Ⅰ群との比較および各下位群間の比較を行った。主な結果は以下のとおりであった。

①攻撃性の仲間知覚では両論児群と拒否児群が多く、人気児群、平均児群、無視児群の3群が少なかった。

②社会的コンピテンスの仲間知覚では、両論児群と人気児群が多く、平均児群、無視児群、拒否児群の3群が少なかった。

③引っ込み思案の仲間知覚では5地位群間に差がなかった。ただし、男女別の4群間比較では、女子の拒否児群が人気児群よりも多かった。

④社会的コンピテンスの自己知覚では両論児群が他の4地位群よりも自己を低く知覚する傾向にあったが、攻撃性や引っ込み思案の自己知覚では5地位群間に差がなかった。ただし、男女別の4群間比較では、引っ込み思案の自己知覚において無視児群が拒否児群よりも自己を引っ込み思案であると知覚する傾向にあった。

⑤孤独感では、人気児群の孤独感が無視児群や拒否児群よりも少なかった。この群間差は男子よりも女子に顕著であった。

⑥ 7 下位群間の比較では、W高群の孤独感が他の 6 群よりも多かったが、3つの社会的行動特徴次元に関する自己知覚には差がなかった。

⑦ 6 下位群間比較では、拒否児Ⅱ群や拒否児Ⅰ群は平均児Ⅰ群よりも攻撃的であると仲間から知覚されていた。また、拒否児Ⅲ群は拒否児Ⅰ群よりも引っ込み思案であると仲間から知覚されていた。しかし、自己知覚では無視児Ⅰ群が拒否児Ⅱ群や拒否児Ⅲ群よりも自己を引っ込み思案であると見ていた。

これらの結果から、小学 1 年生はすでに仲間の社会的行動特徴をある程度分化して知覚できるが、自己の社会的行動特徴については仲間関係の良否にかかわらず全般に自覚していないことが明らかになった。しかし、孤独感の自己報告では地位群間差や下位群間差がある程度みられることから、小学 1 年生は孤独感を自覚できても、それが仲間に対する自己の社会的行動と関連するという自覚に乏しいのではないかと考察した。最後に発達の・予防的観点から、仲間関係や孤独感の問題を子どもの対人行動や社会的スキルと結びつけて指導し、これらの関連性に対する子どもの自覚を促す必要性を指摘した。

引用文献

- Asher, S. R., Parkhurst, J. T., Hymel, S., & Williams, G. A. 1990 Peer rejection and loneliness in childhood. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp.253-273. New York: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤 (監訳) 1996 子どもと仲間の心理学——友だちを拒否するところ—— pp.246-263. 北大路書房
- Asher, S. R., & Wheeler, V. A. 1985 Children's loneliness: A comparison of rejected and neglected peer status. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 500-505.
- Boivin, M., & Begin, G. 1989 Peer status and self-perception among early elementary school children: The case of the rejected children. *Child Development*, 60, 591-596.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1983 Continuities and changes in children's social status: A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 261-282.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A Cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59. New York: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤 (監訳) 1996 子どもと仲間の心理学——友だちを拒否するところ—— pp.14-62. 北大路書房
- Harter, S. 1983 Developmental perspectives on the self-system. In E. M. Hetherington (Ed.), *Socialization, personality, and social development*. Vol. 4 of P. H. Mussen (Ed.), *Handbook of child psychology* (4th ed.), pp. 275-385. New York: Wiley.
- Hymel, S., Bowker, A., & Woody, E. 1993 Aggressive versus withdrawn unpopular children: Variations in peer and self-perceptions in multiple domains. *Child Development*, 64, 879-896.
- Hymel, S., & Franke, S. 1985 Children's peer relations: Assessing self-perceptions. In B. H. Schneider, K. H. Rubin, & J. E. Ledingham (Eds.), *Children's peer relations: Issues in assessment and intervention*. pp. 75-91. New York: Springer-Verlag.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. J. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*. Vol. 2, pp. 251-297. Greenwich: JAI Press.
- 前田健一 1995 a 児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性、引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚 教育心理学研究, 43, 156-166.

- 前田健一 1995 b 子どもの仲間関係における社会的受容度の仲間評定と自己評定 愛媛大学教育学部紀要 第 I 部 教育科学 42, 1, 53-66.
- 前田健一 1995 c 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 教育心理学研究, 43, 256-265.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, 41, 152-160.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. 1993 Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, 29, 611-621.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1990 仲間関係に問題をもつ子ども—自己知覚測度による分析— 宮崎大学教育学部紀要 教育科学 第68号, 9-18.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属小学校の先生方並びに児童の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては井伊三奈さん、市村佳代子さん、河野寿子さん、白石梓さん、土佐香織さん、二神華子さん、三原佳美さん、山田恭子さん、渡邊知美さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。